

「平和の主」「エマオへの道」

今朝の朝日新聞、一面の見出しは「秘密保護法案 強行可決」「武器の原則禁輸撤廃へ」。政治にも歴史にも疎くぼんやりの私でも、これには身震いがした。国会前で反対を叫ぶ声、それもテロだと押しつぶさんばかりの強行採決。これからいったいどうなっていくのだろう……。iPS細胞で様々な病気や障害が治っても、ロケットで宇宙旅行ができるようになって、人間はちっとも変わらない。人間そのものは進歩も進化もしない。子供には「ケンカをしてはいけないよ。たたいたり、けったりして、ケガをさせたら大変なもの」と教えながら、人間を殺すための武器を作り続ける人間って、いったい何なのだろう。

「わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです」「わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうとする意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている」

先日水曜集会で学んだロマ書7章の御言葉が、全人類の慟哭のように聞こえる。

平和を願わない人などいないはずなのに、愛し合って、許しあって、助け合って、みんな仲良く過ごせたらいいなって、誰だって願っているはずなのに、なぜ人は、嫌ったり恨んだり、冷淡になったり争ったり、不和の中で生きねば

ならないのだろう。

「何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いが起こるのですか。あなたがた自身の内部で争い合う欲望が、その原因ではありませんか。」ヤコブ 4:1

「あなたがた自身の内部で争い合う欲望」って、私の内にいろいろな欲望があって争い合うというのもよく分からないなあと、塚本訳を調べてみると

「君達の間での戦いは何処から（来る）か、また争いは何処からか。君達の五体の中で（いつも良心と）戦っている快樂（の慾）、其処から（来るの）ではないか。」とある。

なるほどこれなら良くわかる。私自身の中に快樂の欲、すなわち自己中心のむさぼりがあり、それが正しくあろうとする私の良心と戦っているというのだ。快樂の欲とは享樂的なものだけとは限らない。人から褒められたい、自分の思い通りにしたいなど、なるほど、私の内で良心に戦いを挑むこのような貪欲が幅をきかせている限り、私は「平和の人」ではなく「戦いの人」なのだ。それが、他の人との争いを引き起こし、ひいては戦争の原因ともなるのなら、何をおいてもまず、私自身が平和の人とされねばならない。ほんのささいなことで心の平和が壊れてしまう弱さは、誰から言われなくても自分が知っている。

このように思いを巡らせていると、夕暮れ時、西の空に輝きはじめる金星のように、御言葉が浮びあがる。

「実に、キリストはわたしたちの平和であります」エペソ 2:14

生まれながらに争いの人である私も、心に平和の主であるイエス・キリストをいただいはじめて、平和の担い手となることができる。「あなたがたに平和があるように」と近づいてくださる復活のキリストだけが、どんなに努力して

も得ることのできなかつた平和を与えてくださるのだ。

この世がすべてだと信じて励んできて、行き詰まったとき、この世ならざる天の扉が開いていることに気づいてほしい。自分が、自分で、どうにかしなければという苦しみは、「神を信じ、神に祈る」という幸いな道を忘れてしまった人間の悲惨から来るのだから。

自分の弱々しい良心ではどうしようもない現実の中で、「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう」と呻くとき、「だれがわたしを救ってくれるでしょうか」と叫ぶとき、その苦難のただ中に、キリストがいてくださる。「安心しなさい。わたしだ。恐ることはない」と言ってくださる。私たちの希望はここにある。

*****:

「エマオへの道」(ルカ福音書 24:13~35)の続きを書こうと思っても、読めば読むほどこの箇所は、そのままを自分で読むのが一番いいのだとわかってくる。素読するのにこれほどふさわしい箇所はないように思う。

エマオに向かって話しながら歩く二人に近づいて、「その話は何のことですか」と問われたイエス様。その問いに答えた二人の話に耳を傾けると、当時の状況、弟子たちの心の動きが手に取るようにわかる。そして、キリスト教〈キリストの福音〉とは、人がどう思うとか感じるとか、どのように考えるとか、人間の側の思想や観念ではなく、具体的な出来事なのだとはつきりわかる。「ナザレで育ったイエスという人は、行いにも言葉にも力があつたが、十字架に付けられて死んでしまった。ところが三日目の朝、墓に行った婦人たちは、遺体を見つけることができず、『イエスは生きておられる』と告げる天使たちを見た。」人間がどう思うかなど全く問題にせず、ただ具体的な事実だけが言われている。

後はこの事実を虚心坦懐に信じるかどうか、それは私たち一人ひとりに任されているのだ。

イエス様は二人と一緒に歩きながら、聖書全体にわたり説明されたとあるが、「聖書」と言ってもこの当時は安息日に会堂で聞いて覚えた聖書であり、イスラエル民族だけに開かれたものだった。それが今では、創世記から黙示録まで全巻そろった聖書を世界中の人たちが読むことができるとは何という恵だろうと、それこそ胸が熱くなってきた。罪に囚われた人間は、進歩も進化もしなくても、神の歴史は確実に前進している。「御国のこの福音はあらゆる民への証として、全世界に宣べ伝えられる。それから、終が来る」と言われたイエス様のお言葉が、何ともリアルに迫ってくる。

28節～35節まで、復活のイエス様をこれほど見事に描いた記事は他にはないだろうと思う。復活の主は、今ここにおられる。今宵も言おう。「主よ、一緒にお泊りください」